

=Traduzione=

2003年イタリアで、桐野夏生氏の小説『アウト』が、” Le quatttro casalinghe di Tokyo (東京の4人の主婦)” というタイトルで翻訳出版された。夫の暴力と虐待の繰り返しに耐えかねた妻が夫の首を絞め殺してしまうというのがテーマである。それを読んだ私は、イタリアの現代著述に、妻が夫を殺害するという同様なテーマを扱った小説・物語の作家が存在するのかに興味を持ち、簡単な調査をした。この種の出来事を扱っている小説・物語は、古い世代の作者の作品であり、若い世代の作者の稀なケースでは、話は現代ではなく、遠い過去に置かれていることが判明した。

若い世代の作者の重要な例として、1990年に出版された、1861年イタリア統一の1000人部隊派遣時のシシリアを背景とする、Maria Rosa Cutrufelli(1946年生)の小説” La briganta (女山賊)” がある。教育のある若い女性 =女性が教育を受けることが妨げられていたその時代の例外である= が己れを制することのできないほどの自由への欲求で、父親に結婚を押し付けられた、寝台の隣で眠っている憎い夫の喉をヘアピンで刺し殺し、蜂起軍に入っている弟のところへ赴く物語である。

前の世代のものとしては、著名な作家である Natalia Ginzburg (1916-1991)が1947年に出版した” E’ stato cosi’ (こうであった)” がある。夫の裏切りと虚言に怒りの頂点に達した妻が、ピストルで夫の頭を打ち殺すのである。Ginzburgは、女性と男性は同じように、同じ理由で悩み苦しむと主張し、女性の側のみ立つ事をいつも否定していたが、その逆を明示する内容を物語るという意味において、このGinzburgの作品は”意識の下にあるフェミニズム”と定義できるかもしれない。

1949年に出版されたAlba De Cespedes(1911-1997)の小説” Dalla parte di lei (彼女の側で)” も同様である。不眠に悩む一人の女性が、自分と夫を隔てる睡眠—越えることのできない高い壁、終わりのない石の壁—を打ち壊すために、隣で眠る夫の背をピストルで打つというシーンがある。実際には主人公であるAlessandraは自殺するつもりであったが、助けを求める彼女の声に眠りなさいと答える夫の言葉が、彼女を自殺願望者から殺人

者に姿を変えさせる。

才能豊かな作者 Anna Banti (1895-1985) は、我が国において女性に対する抑圧が乱暴で容赦のなかった数世紀前に、自分の作品の主人公を設定する。1940 年に書かれた ” Il coraggio delle donne (女性の勇気) ” は、1800 年代末の夫婦間の憎悪と残忍な関係について書かれている。夫は絶えず妻を殺すと脅し、ベッドの傍らにある小箆筒にリボルバーをしのばせている。ある晩、妻は夫のリボルバーを奪いマットレスの下に隠す。自分の夫である迫害者に対して使用しないという、殺人の衝動に対する勝利である彼女のこの行為は、寝台に夫と自分を区切る高い壁を築き、永久に彼女の安全を保証する。女性が夫に異議を唱えたり、自分自身を克服するものは、“心の内に築く壁” であり、それは、多分結婚が強固で解消出来なかった時代に女性が築くことができた唯一のものであろう。

古い世代に属する作者の物語は、男性に隷属、依存しなければならなかった時代の女性の無能さと抑圧された怒りの程度を示すシグナルではなかつたろうかと自問する。しかしながら、現在は別の方法がある。離婚や家族の権利などを法律で規定され、女性は、自分を不幸に導く絶え間無い争いを逃れ、将来性のない婚姻関係を解消し、新たに生きることが始められるという、精神的及び経済的な独立をある程度獲得した。イタリアでは、離婚や別居の申請は、ここ何年も殆どのケースが女性側からなされている。しかしながら、多くのケースにおいていまだに高い代償：恨み、脅し、暴力、迫害、復讐、を支払う決意であり、極端な場合には死を伴う。実際に、現在イタリアでは、捨てられた、または捨てられるのを恐れる夫が、自分の支配、所有から思い切って逃げようとする女性を殺して復讐するというケースがしばしばある。：1998 年から 2006 年までの 8 年間で、別居後に起きた犯罪（売春婦の犯罪は除く）は 760 件あり、その内の 70 件は犯罪の後に男性が自殺をしている。相手は、別居、離婚をした元妻、別居中や同居している妻や婚約者、愛人などである。また、単に関係をせまる男性を拒否した女性に対する犯罪もかなりの数になる。女性の自立や自由に我慢がならないという男性は、自分達の主導権、所有欲、更には男性としてのアイデンティティーを問題にする。

2002 年から 2006 年の間に起きたこの種の犯罪の幾つかのケース：— 妻から別居を要求され話し合いのために訪れていた弁護士の事務所で、妻をピストルで殺害、自分も自殺を

する

- 別居を要求する妻をピストルの弾 3 発で殺し、遺体を井戸に投げ込む
- 他の男性に恋をした婚約者を絞め殺す
- 法廷で離婚のための審理の最中に妻をピストルで殺した憲兵
- 自分の意思に反し家政婦の仕事を探してきた妻をナイフで殺す— 2 年間別居中の元妻を道路で殺す
- 自分を捨てた婚約者の喉を車中で切り殺した 36 歳の男
- 自分を捨てた婚約者を 4 年間脅し迫害した後、道路でナイフで殺す
- 元旦に夜中じゅう他の男性と踊り続けた 68 歳の愛人を殺した 62 歳の男性
- 自分を断ったという理由で同僚の女性を殺す
- 嫉妬のために 14 歳の少女をナイフで殺した 16 歳の少年
- 同じ理由で元学友の女友達をナイフで殺した 24 歳の男性
- 同じ理由で 17 歳の少女を殺した 22 歳の男性
- 同じ理由で 17 歳の少女を野原で絞め殺した 22 歳の男性

これらは愛の犯罪、情熱ゆえの発作的犯罪ではなく、よく言われるように、力や所有欲から突き動かされた計画的な犯罪である。

この種の女性に対する犯罪は、我が国では特別な反響は呼ばない。新聞に記事が載り、翌日には消えている。殺人者が移民であったり、とりわけイスラム教徒の場合には、私達の文化にそのような不名誉はないと強調するかのように、誇張されることを付け加えなければならないだろう。本当に稀ではあるが、男性の評論家がこの種の犯罪に男性を駆り立てる不安、恐怖、フラストレーションや神経のゆがみの原因を掘り下げている。女性が自立のイニシアチブをとろうとする時、未だに伝統的な女性の従属にしがみつき、粉々にされる男性の弱い特性である。イタリアでは、” delitto d' onore （名誉ある犯罪）”、即ち、いわゆる『性道徳』に違反した女性を殺す夫、婚約者、父親や兄弟に対する情状酌量は、1981 年になってようやく法律から削除されたことを忘れてはいけない。夫に裏切られ、捨てられたために夫を殺す妻のケースはわずかであり、自分自身や自分の子供を殺すケースよりも少ない。

若い世代のイタリア人の作家が、あたかも直面するのに抵抗があるかのように、また、封

印をするかのように、この日常的でドラマチックな現実を記録しないのは何故であろうかと私は自問する。私自身、現実において頻発する暴力的なストーリーの呼びかけが聞こえないかのように、自分の小説や物語にこのテーマを取り上げることを考えたことがない。：しかし私は、他の多くの作家と同様に、男性と女性間の争い、コミュニケーション不足の問題、反目の増大の分析に協力した。作家やTVや新聞記者のグループと一緒に、女性に対する犯罪の訴えを集めた本を出版するところである。

Roberto Naggi と署名のある Brescia の新聞に書かれた『アウト』の評論から、日本で女性が男性を殺したケースは、1989年から1991年にかけて7件であったが、2000年から2003年にかけては30件あることを知った。その数は無視できないほどの増加である。日本で何人の男性が女性を殺したかは問題視しない。しかし、これらの殺人者にそういう行動を起こさせる原因は何であるのか、そして、この悲劇は、犯罪以外の解決がないというやり切れない女性側の無力な敗北であり、それがどの程度のシグナルであるかと自らに問う。

『アウト』を書くという桐野女史の決意が何から生じ、この出来事が日本人の日常生活の現実を投影しているのか、または、単に怒りのメタフォラを表現しているのか、私は彼女に聞いてみたい。多分、沢山の女性が欲求し願望する、血生ぐさい、過激で空想的な反乱ではないのか。

4人の主役の女性達は、一人一人が、労働し、たとえ僅かにしても稼いでいるにもかかわらず、追い詰められた状態にあるように見える。：年老いた義母の看護を押し付けられた女性、豪華な洋服以外に人生を評価する手段を持たない浅薄な若い女性、夫から奴隷的な扱いを受ける妻、家をホテルのように使い、彼女と言葉を全く交わさない夫と息子を持つ妻。これらの女性は、現実の生活状況にある典型的な人物像なのであるだろうか？

『アウト』に登場する男性は最悪である。：夫は無関心であるか暴力的であり、子供は口を聞かない。同僚は敵対し、職権濫用者である。サタケは自分の手で殺そうとする瀕死の女性のみには性的興を感じるという性的倒錯者である。ただ一人肯定的な男性はカズオである。オリジンは日本人であるがブラジル人、つまり、東京に住む外国人である。この肯定的な人物像は桐野女史自身の批判の心の産物なのであるだろうか？何を明示したいのであるだろうか？

彼女の小説では、スーパーテクノロジーの現代日本における女性の状況を訴えている。女性は未だに差別され男性より下と見なされ、骨の折れる、賃金の安い、しばしば誰もがしたがる嫌な仕事に就かされる。マサコのケースでは、職場における虐めについても書かれている。しばしば乱暴に扱われ、無視され、意思疎通の無い、無関心で愛の無い環境の中で、孤独にこもる奴隷的主婦の役割についても書かれている。これは一般的な状況なのであろうか？

イタリアでは、勉強をし、大学を卒業する女性は既に数において男性を凌いでおり、彼女達の成績も上回っている。しかし、その後、女性は専門を要しない仕事だけに就かされ、キャリアを積むことができない。同等の仕事には男性より給与が少なく、政治や権力の世界には女性は殆ど見受けられない。また、結婚をすると、家庭と外での二重の労働が強いられることになる。日本とイタリアでのこういう境遇に類似性はあるのか？これについて桐野女史は何か言いたいことがあるのであろうか？

『アウト』では、残虐な犯罪に及ぶまでの女性同士の友情と団結が、書かれている。日常生活の現実の中で、女性の友情と団結は存在するのであろうか、また、どのようにそれを表明するのであろうか？

男女同権主義は、いつの時代にどのような形で日本の女性は得たのであろうか？彼女たちの差別に対する意識と変化への要求が、大きな影響を与えたのであろうか？

桐野女史のイタリアで翻訳された2番目の本”Morbide guance (柔らかい頬)”には、将来の展望と意味の無い人生に耐えられなくて、18歳で家から逃げ出した若い女性カスミが出てくる。この脱出は、女性の服従の伝統を破った。しかし、彼女の心に呵責と大きな苦悩を残し、彼女の人生の全ての側面(仕事、結婚、彼女の2人の娘)にそれがかかわる。愛人の腕の中にいるたまのひとときだけ生きて感じる。5歳のユカリの失踪は、彼女自身の存在を根本からかき乱し、現在と過去の女性として母親として道を外している自分に対して、受けるべき当然の罰のように思っているようである。女性の持つ罪悪感、しばしば自虐的な自責をどのように考えているのであろうか？

小説の主人公達は、明確な目的や理想なしに、愛情や人とつながりのない孤独や心不安の中で生きている。ある女性は、癒すことのできない内面性の破壊、もしくは、アブノーマルなファタンジューの傾向を秘かに抱えて生きている。これらの人物は西洋においては共有の悲劇のシンボルであるが、日本にもこれが伝染したのであるだろうか？

家庭や学校における男性と女性の教育の違いは何であろうか？

男性と女性の役割の差を決定付けるものは何であろうか、また、どのようなものであるか？

女性の中に、この問題についての自覚はあるのか？

問題解決のために何をしているのか？

最後に桐野女史の仕事の方法についてお尋ねしたい。

— いつ書きますか？ 午前、午後、夜ですか？

— コンピューターを使いますか？

— 小説を書き始める時に、頭の中に最後まで筋書きがありますか？

— 書き終わってから、書いたプロセスを再構築することができますか？

— 資料を集め、リサーチをし、実地調査をしますか？

出来事が展開する場所の写真を撮ったり、または、地図を使用しますか？

桐野女史の資料を拝見すると、42歳で初めての本が出版されたと書かれています。42歳よりかなり前から書かれていたそうですが、私自身も43歳で世に出ました。文学を志す女性のレビューがこれほどに遅い原因を、あなたはどのように考えていますか？